

強迫傾向に関するメタ認知モデルの検討

Examination of a metacognitive model for obsessive- compulsive tendency

岡田 まりあ (Maria Okada) 指導：根建 金男

問題と目的

強迫症 (OCD) は、強迫観念・強迫行為を有することを特徴とする精神疾患である。近年、強迫観念と強迫行為は健常者にも同様のものが見られることが明らかになっている。本研究では、頻度や強度、苦痛度などが軽度な強迫的特徴を「強迫傾向」と定義する。

Wells (2009) は、メタ認知モデルを基盤とし、OCDのメタ認知療法 (MCT) を考案した。メタ認知モデルでは、心配や反芻、脅威に対する注意の固着は「認知注意症候群 (CAS)」という不適切な認知的側面として捉えられている。また、MCTの最終的な治療目標は、CASを、自己の意識を客観的に観察できる状態である「ディタッチト・マインドフルネス (DM)」に変容することであるとされている。そこで本研究では、Wellsの考案したOCDのメタ認知モデルに基づき、強迫傾向のメカニズムを検討することを目的とした。

研究1

目的: OCDのメタ認知モデルに基づいた強迫傾向のメタ認知モデルを作成し、共分散構造分析によって検証する。
方法: 私立大学生289名を対象に、質問紙調査を実施した。有効回答者数は、231名 (男性: 114名, 女性: 114名, 不明: 3名, 平均年齢: 19.90 ($SD=1.20$)) であった。質問紙には、日本語版MCQ-30 (山田ら, 2007), TAFS邦訳版 (鈴木ら, 2004), 日本語版PSWQ (岡ら, 2009), 侵入思考への認知的対処尺度 (今井, 2006), 思考抑制尺度 (松本, 2008), J-PI32 (鈴木, 2004), 能動的注意制御尺度 (今井ら, 2015), Detached Mindfulness Mode Scale (DMMS; 今井ら, 2012) を用いた。

結果と考察: 研究1における分析1の結果より、OCDのメタ認知モデルとは異なり、メタ認知レベルの変数として想定していたTAF (思考と行為の混同) は、直接的に強迫傾向に影響を及ぼすことが明らかになった (Figure1)。また、分析2では追加的検討として、注意制御機能とDMがCASに与える影響を検討した。その結果、DMが一部のCASに対して影響を与えることが示された。

研究2

目的: 研究1によって作成された強迫傾向のメタ認知モデルに沿って、強迫傾向をもつ大学生に実際に介入を行い、その効果を検討する。

方法: 私立大学生376名に、強迫傾向による妨害感を測定するJ-PI32を用いて、スクリーニング調査を行った。全体の平均得点+1SD以上の者のうち、実験への参加を承諾した24名を実験参加者とした (男性: 10名, 女性: 14名, 平均年齢: 20.96 ($SD=1.73$)). 24名は、DM技法を行うDM群8名, メタ認知変容の技法を行うメタ認知変容群8名, 統制群8名に振り分けられた。全ての実験参加者に、プレテストとポストテストにおいてMCQ-30, TAFS, PSWQ, 思考抑制尺度, 侵入思考への認知的対処尺度, J-PI32, DMMSへの回答を求めた。DM群とメタ認知変容群には2週間、ホームワークに取り組んでもらった。

結果と考察: DM群, メタ認知変容群は共に、CASや強迫傾向の得点について有意な低下を示さなかった。しかし、DM群においてのみ、J-PI32得点の減少が観察された。また、TAFは群と時期の交互作用が有意であった。そこで単純主効果の検討を行ったところ、DM群はPre ($M=34.63$) からPost ($M=27.63$) にかけて有意な得点の減少が示された。また、TAFの下位因子である「道徳」についても時期と群の交互作用が有意であり、DM群においてPre ($M=22.13$) からPost ($M=16.88$) にかけて有意な得点の減少が示された。以上のことから、強迫傾向者においてDMの影響力が大きいことが示された。今後も強迫傾向とDMがどのような関連を持っているかを検討していく必要がある。

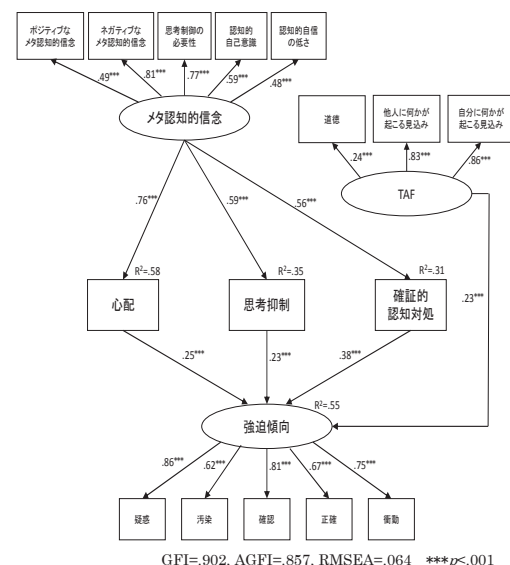


Figure1 研究1分析1における共分散構造分析の結果